審査の結果の要旨

氏名　仁平　典宏

現代の日本社会において、「ボランティア」と呼ばれる活動は、福祉や教育といった複数の分野と関連をもちつつ、「参加」や「運動」を通じて、個人と社会をつなぐ結び目の一つとみなすことができる。と同時に、「自己実現」や「生きがい」「成長」など、個人の形成が行われる場や機会ともみなされている。それでは、ボランティアと呼ばれる活動は、個人の責任や自立を重視する福祉国家のネオリベラリズム的再編が進むなかで、社会の変化とどのように関係しているのか。本論文は、言説と活動の二つの面で、ボランティアの意味づけが、ネオリベラリズム的な社会の再編とどのように共振しあっているかを、理論的、実証的に明らかにしようとした社会学的研究である。

本論文は 2 部よりなる。第 1 部では、「贈与のパラドクス」(贈与と見なされたとたんにそこに反贈与の意味が読み込まれる)を手がかりに、ボランティア言説をめぐる歴史・知識社会学的分析が行われる。1 章での問題設定に続き、2ー4 章では、ボランティアという言表が現れる以前に、「慈善」「奉仕」「献身」といった言葉で表現された福祉領域における活動の意味の変遷が、20 世紀末から 1950 年代までの膨大な言説資料の分析を通じて解明され、それぞれの時代に贈与のパラドクスをいかに解決しようとしたかが示される。そして、すでに奉仕をめぐる議論において、「友だちのような対等の関係」「自分の成長」「与え合い」といった現代のボランティアをめぐる言説と同型の意味づけが行われていたことが確認される。6 章ー10 章では、ボランティアという語の出現以後、ボランティアの意味づけが、「自発性」(＝非強制性)や「対称性」を特徴とし、さらには「人間性回復」や「自己実現」といった自己効用論的な展開を遂げていく過程（「贈与」から「交換」への展開）が解明される。そこでは、ボランティアが教育的価値を附与されるに至る言説の特徴も明らかにされる。

第 2 部（11ー14 章）では、既存の統計データを用いた計量的な分析により、ボランティア関係者の意識が、ネオリベラリズムと共振している可能性が、「格差」問題（12 章)、道徳とセキュリティ問題(13 章)、社会運動（14 章）といったテーマごとに検討され、批判的な考察が加えられる。15 章では野宿者援助活動のフィールドワークを通じて、ボランティアの新たな可能性について試論が展開される。そして、終章では、以上の膨大な分析結果のまとめを行った上で、教育社会学的含意と政治社会学的含意とが提出される。

生涯学習論や学校参加論など、教育の分野でも市民参加やボランティア活動が重視されるなかで、本論文は、ボランティアと呼ばれる言説・活動の分析を通じて、自発/強制、対称/非対称といった単純な二分法には回収できない、（市民）社会と個人をつなぐ、逆説的で両義的な関係を、詳細な言説分析とデータ解析、広範な文献渉猟による理論的考察を通じて明らかにした。これらの点で、今後の教育研究に重要な貢献をなすものと考えられる。以上により、博士（教育学）の学位論文として十分な水準に達しているものと認められる。